

氏 名 フレデリック クレインス
Frederik Cryns
 学位(専攻分野) 博士 (人間・環境学)
 学位記番号 人 博 第 595 号
 学位授与の日付 平成 15 年 3 月 24 日
 学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
 研究科・専攻 人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
 学位論文題目 宇田川玄真の神経観
 ——「遠西医範」『医範提綱』の文献学的研究——

(主査)
 論文調査委員 教授 松田 清 教授 船橋新太郎 教授 富田恭彦

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は蘭学者宇田川玄真(1769-1834)がオランダ語版解剖書を典拠として解剖・生理学思想をまとめ、文化2年(1805)に刊行した医学教科書『西説医範提綱』(以下、『医範提綱』と略す)およびその草稿「遠西医範」を対象として、玄真の神経観の基となる、神経に関する玄真の知識・思想形成と『医範提綱』の日本医学発展史上の意義を文献学的分析によって解明することを目的としている。構成は「はじめに」に続いて、本文全5章、結論、注、参考文献からなり、計286ページ、および図版52ページからなる。

第一章「『医範提綱』の典拠」では、典拠となったブランカールト『新訂解剖学』(1696)、フェルハイエン『人体解剖学』(1734)、パルフェイン『外科用人体解剖学』(1733)、クルムス『解剖図表』(1734)、ウインスロー『人体構造の解剖学的解説』(1753)のそれぞれについて、同時代の医学書との比較によって医学思想史的分析を行っている。すなわち、ブランカールト(1650-1702)はボンテクー(1640-1685)の影響下にデカルトの魂気 *spiritus animalis* 説をさらに機械論的に追求し、血液と同様に流動する「神経液」説を唱えたこと、フェルハイエン(1648-1710)の解剖書は魂気説に立ちつつ、ウィリスの脳・神経研究に影響を受けた実証的な教科書であり、パルフェイン(1650-1730)はフェルハイエンを模範として外科用に簡潔にまとめていること、クルムスはフェルハイエンを模範としながら、神経思想についてはシュタールの魂論 *vitalismus* の影響のもと、魂気説・神経液説を否定していること、ウインスロー(1669-1760)は観察を重視するステノ(1638-1686)に従っていること、を解明した。

第二章「『遠西医範』の典拠と脳・神経の記述」では、「遠西医範」の現存する5写本(東京大学総合図書館所蔵自筆草稿「口篇」・「脳神経脊髄篇」、東北大学図書館所蔵自筆草稿「膜」・「肺篇」、天理図書館所蔵自筆草稿「眼篇」、同所蔵写本「滲胞編」、国会図書館所蔵写本「中腔」)全部の訳文について典拠原文をすべて同定し、主たる典拠は解剖学的記述がパルフェインに、生理学的記述がブランカールトに依っており、フェルハイエンとクルムスは追加的に利用されていること、ウインスローは用いられていないことを分析した。とりわけ「脳神経脊髄篇」において、玄真がブランカールトの神経液循環説を受容しつつ、その神経液説の背景にある魂・身体二元論の思想は理解しておらず、内経医学の枠内で解釈していることを明らかにした。

第三章「『医範提綱内象銅版図』の原図」では、玄真が『医範提綱』とは別に編集刊行した『医範提綱内象銅版図』(文化5年, 1808)を対象に、銅版師亜欧堂田善(1748-1825)製作の銅版図全15葉に含まれる合計52の解剖図すべてについて、フェルハイエン(パルフェイン)、ブランカールト、クルムス、さらにブラウン(1642-1700)の『新筋図表』(1694)、ビドロ(1649-1713)の『人体解剖』(1690)との典拠関係を調査し、フェルハイエンが主要な典拠であることを解明した。これによって、図に選択の余地がある場合、玄真はより古い解剖書の図を採用していることが明らかになった。

第四章「『医範提綱』の内容と脳・神経思想の受容」では、ブランカールトの神経液説は内経医学の枠内で理解可能な説であり、受け入れやすいものであったために、「遠西医範」における同様、『医範提綱』においても玄真がこの説をオラン

ダ語版解剖書の中心として受容したことを論証した。また、神経液説の受容過程においては、魂・身体二元論を含む機械論的思想から内経医学的思想への変容がみられるのに対し、病理学については神経液説にもとづく理論を受け入れ、呼吸、血液循環、消化、受精などの生理機能に関しては、オランダ語版解剖書の諸説・知識をそのまま受容していることを指摘した。

第五章「『医範提綱』の普及と影響」では、国内31カ所の所蔵先の現存本78点について、書誌的調査を行い、15版種および無刊記本、写本を確認した。その結果、『医範提綱』が最も流布したのは弘化から嘉永年間であり、宇田川家の家塾風雲堂や京都小石家の究理堂をはじめとする蘭学塾で教科書として広く利用されたこと、初版刊行の文化2年（1805）から明治8年（1875）に至るまで、70年間にわたるロング・セラーであったこと、また、現存本に付けられた不審紙の分析から、『医範提綱』の冒頭部分である「神経」の章に不審紙が圧倒的に多く、「神経」が江戸後期知識人の関心の的であったこと、を明らかにした。

結論として、『医範提綱』は日本医学発展史において啓蒙書としての役割を果たしたと位置づけることができ、『医範提綱』において受容された神経液思想が媒介となり、西洋医学知識を受け入れやすいものにしたという点に、『医範提綱』の意義がある。

論文審査の結果の要旨

本論文は以下の点で、極めて優秀な論文である。

1. 日本における蘭学研究、とりわけ蘭医学の研究においては、従来、伝記的研究に偏りがちであり、典拠となった蘭書との綿密な照合と翻訳過程の分析が十分に行われてこなかった。本論文は、こうした研究史的欠陥を補うのみならず、今後の蘭学研究における文献学的研究の模範となる高度な水準に到達している。
2. 申請者はオランダ語を母語とし、ギリシャ語・ラテン語の教養のもとに西欧近代諸語に精通している。本研究科修士課程入学以来、日本の古文読解に精進するとともに、現代日本語による論文執筆能力を飛躍的に高め、その成果をもとに本論文を執筆した。論旨明解、日欧の古文読解にもとづく実証的事実を比較思想史的に総括する申請者の構成力が生かされている。
3. 典拠となったオランダ語版解剖書の調査にあたっては、内外をとわず各所蔵先において、3年間という限られた時間内に、可能な限り書誌的調査を行い、現代欧米における先行研究を参照しつつ、同時代の主要な医学理論家との影響関係をテキストに即して解明し、典拠の医学史的位置づけを的確に行った。
4. 玄真が典拠の書名をあげていない草稿「遠西医範」については、訳文の解説をすすめて、オランダ語を母語とするとはいえ、複雑困難な同定作業をへて、訳文の一行一行の典拠をすべて解明することに成功した。
5. 同じく同定がきわめて困難な『医範提綱内象銅版図』の典拠についても、一線一線を微細に比較照合し、全52図の解剖図について解明した。
6. 「気」の循環をもととする伝統的な内経医学とブランカートの神経液説の近似性が、宇田川玄真の「神経」理論受容の背景にあるとの指摘は、蘭学時代における西洋の機械論的人間観の受容困難性とともに、きわめて重要な指摘であり、説得的である。
7. 『医範提綱』の諸版本、諸写本の書誌的調査についても、限られた時間内に国内所蔵先の資料を精査している。その成果として、日本における西洋医学知識の流布において、内経医学の果たした媒介的役割をよく実証することができた。これは書誌的研究方法の有効性を示すもので、本論文の優れた点でもある。
8. 申請者は修士論文において、スウィーテン『ブールハーフェ箴言解』（1763-1776）の翻訳である坪井信道の『万病治準』（文政9年、1826）を取り上げ、近代西洋医学の新知識が幕末に流布した過程を分析するとともに、翻訳者の坪井信道が原著者の機械論的医学理論をいかに理解しなかったかを、テキストに即して解明した。本博士申請論文は修士論文の成果の延長線上に出現した研究対象を、以上挙げた厳密な文献学的研究方法によって分析し、医学史研究における比較思想史的視点を深めた。

以上を総合して、本学位申請論文は、歴史文化を通文化的な広がりにおいてとらえる人文学的な新研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻歴史文化地域論講座にふさわしい内容をそなえたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成15年1月17日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果，合格と認めた。